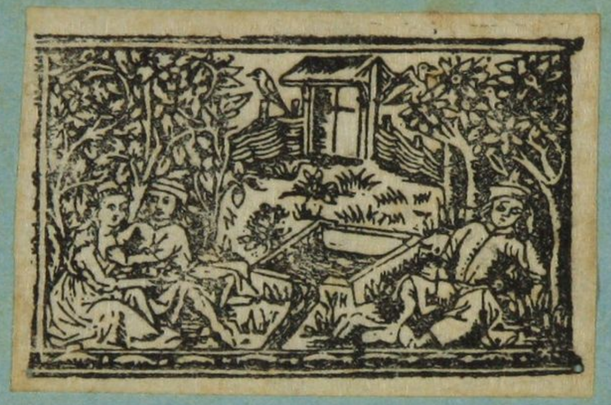

墜失スルカイ

イカルス失墜

イカルス失墜

墜失スルカイ

樹木のなかに思惟がある、といふ言葉がどこからか來て私のなかに巣くつた。電車道をそれると、コンクリイトの壁がひつそりと續いてゐた。壁の蔭にある楡の梢が頭上ではげしく風に搖れてゐるのに、私の歩く壁の下の道はほとんど空氣が動かない。こんなことはよくある。風が袋になつてゐる庭園のなかで渦卷いてゐるのだ。私の歩いてゐるのは風の埋めない空間だ。その稀薄な空氣が私の內部からなにかを引出さうとする。なにかフイルムの切れ端のやうなイメイヂが驅けすぎる。技師の間違ひでドイツ語の喉音のやうな響を殘してひつかかる錄音の尻尾。なにが私に起つたのか。私の頭腦は雲が一面に吹き流されて停滯し、風が激しいにもかかはらず少しも動かないあの乳色の天候に似てゐる。イカルスはそのやうな雲をつき拔けて海に落ちたにちがひない。けれども雲は再びイカルスの上に閉ざし、海面もまたイカルスの上に閉ぢられてしまつた。一つの帆かげもアドリアの海上には見えなかつた。おそらくそのやうな風景のなかでは魚類も水の中空に靜止してゐるだけだらう。

空漠として私はなにも目的を持つてゐない。人の顏、それが誰か知つてゐる人の顏に直る瞬間がある。だがすぐにまたそれはぼやけてしまふ。私が街に出るとき忘れて來た筈の無數の顏が花束のやうに集つて群がつてゐる。私はなにをするに生れて來たやうにも考へられない。ただこの白つぽい水面と雲との間に靜まつた空間のやうなものを自分のイメイヂとして持つてゐることだけに辛うじて耐へてゐる。そのイメイヂがあつてからの出來事は、イカルスがそこを落ちて海へ沈んだだけだ。それすら私は見なかつた。だが私はそれ以外になにも持つてゐない。イカルスだつて構はないぢやないか。だが今日はなぜそんなことばかり考へ續けてゐるのか。私をじつとしておかない不安はなにか。なぜ私はあてもなくかうして歩きまはつてゐるのか。その原因を思ひ出さうと努めるだけでも私は痴呆になりさうだ。だから、どんな犧牲を拂つても私は自分をそつとして置かなければならない。ところがこのやうに靜かな裏街は、その靜けさがかへつて私を不安にするのだ。

樹木のなかに思惟がある、といふ言葉は、自分をまぎらすために私がわざわざ呟いてゐたのだ。梢の動搖。私にはそれがなにも重要だとは思はれない。表現する義務が一度だつて私のイメイヂの空虛さを裏切らなかつたことはない。私がした無限の雜談、私がした無數の表現、そ

れは綠色の痰のやうに人々の皮膚にべつとりとついてゐる。彼等は私の前から立去ると氣づかれぬやうにそれを拭つて棄てる。そのとき、もう私は次の男に私の表現をはねかけてゐる。さうすることによつて、私のモオビッドな映像が彼の心象に描かれたと私は考へる。だが半ば私はあきらめてゐる。その奇妙な感情や映像は私の口から虹のやうに吐き出されるだけで、私が人の注意をそれに喚起した時にはいつも意地惡く消えてしまつてゐる。描かれた瞬間に誰がそれを捉へるものか。それに私はそのイメイヂを持つてゐるだけですでに精一杯であつて、私の口をついて出る表現は實は悲鳴のやうなものに過ぎないのだ、と。

ひとりの少女が私とすれちがふ。それは悲しげでも樂しげでもない、單に少女であるために相應はしい表情をした、貧血らしい、赤い縞のあるネルをきた少女である。それは必ずしも現在が在るこの時間にここに現はれる必要もない少女である。この灰色の長い壁とその向側に繁つてゐる楡の梢とのこの風景は、私が十二歳の少年であることを妨げはしない。私の視覺のほかには何の約束もなく、時は必ずしも今であることを要しない。十二歳の私ですらこのやうにして壁に沿ふて此處を過ぎ、このやうにして少女を見て去ることができた筈である。時が私のためにしたことは物體を傷つけて不透明にしただけである。時の約束を持たぬこの風景は、實在

から切り離されて浮遊するひとつの書割になつてゐる。だからこれは特定の時間に實在してゐないのだ。在るものは時の傷つけた跡を觸知しうるものである。たとへば騷いでゐる木の葉、少女の下駄の下で鳴る小石、少女の蒼い皮膚の私に移した記憶、等である。それ等の實在が時間に堆積して移行し、それを所有した私はそれの停止した處で氷河のやうに溶け去る。

思惟はまた、はたと停止して思惟自らの斷層を露出する瞬間がある。私の存在を制約してゐる原罪と私の日々の表現の無限の無駄との間の取りかへしのつかぬ錯誤に氣づく一瞬がそれだ。この壁の中に誰が住んでゐるか。牧師か寡婦かあるひは金貸しでもあらうか。このやうに深く護られねばならぬほど不幸な人間、時代から置き去られて色あせた記憶を持つ、鴉のやうな老人の顏が椅子によつてゐる。それ等のものは、今では死に、不要な記憶の襞に隱れたと思つてゐたのに、あるときその顏を動かし、私の髓に突刺るやうな表情をする。ああ、私のする行爲のなかに隱れた意味は、この墓石のやうに心を閉ぢた者等にすら觸知されずにゐることはない。心象のあまりの裸形、絕對に蔽ふことのできぬ醜形。顏の筋肉のひとつの收縮は、私自身が自己の意志を悟るよりも前に、幾何學的な正しさによつて、私の意慾するものを人間のなかの最も愚鈍な者等にすら知らしめる。自ら何等の爲すところなくして、他をのみ窺視し、頰を

ゆがめ、また椅子のなかに眠り込む、影のやうな、女のやうな、壁のなかに息をひそめてゐる奴等をそれ故に殺戮しろ。

　ああ何故か今日私の精神はものに追はれて少しの安らかさすらない。絶對にない。そのことのために、そのとき私の眼前を過ぎる少女は massacre されていい。裏街をとぼるこの少女になにがあるか。彼女は軟い肉片と血液の組織體であつて、誰の娘でもなく、誰のやさしい唱歌友達でもない。その生の viscera が引き出されて土にまみれることによつて、なにものかが私の中に開けるにちがひない。しかもそれから遁走して行く私の猫脊には惡魔が爪を立ててしがみついてゐる。いくつもの角が私の曲るためにあり、最後の曲り角は私を袋道に追ひ込む。そのとき私の頰に觸れる惡魔の生暖い手。その絶體絶命が夢のなかで私を締めつけるだらう。いま私とすれちがふ少女は、また私の想念の兇惡さに復讐するために、私の未來の時間の漠とした擴がりのなかで、夢の犯罪の不安な念となつて私の精神を搔き亂すにちがひない。私はとある街角でこの少女に似た少女の後姿を見る。彼女が電車に轢かれさうになつてゐたり、なにかとり返しのつかぬ落しものをしたために怖しい絶望にゆがんだ表情をし、また自分がどんな醜い慘めな表情をしてゐるかといふことに氣を配る餘裕もなく口をあけて歩いて來るのに私はは

たと行き會ふ。すると私は自分が彼女のその不幸の犯人であることを知る。なぜならば、そのとたんに私は逃げ去らうとして、胸の筋肉と股の筋肉をぐつと引きしめ、身を浮かせるからである。なぜ私は今このやうに逃走の衝動を感じたのか。なぜ私はこの少女の不幸の原因が私であると直ちに決めたのか。慌ててゐるために私はすぐ思ひ出せない。過去のどこかの一點に私に痛くふれるもののあることだけはおぼろに解るが、それはどこであつたか。私はよく夢のなかの恐怖を突然思ひうかべて、不安な事情が私の境遇に起つてゐたのに、うつかりしてそれを考へることを忘れてゐたやうにどきりとし、それの起つたのは夢であつて、私がそのとき犯罪者であつたことや、私が誰かに追ひかけられてゐたことはもう少しも心配する必要がなく、私の不安の原因のどの事もどの事も夢であつて、何の顧慮も實際生活にはいらないのだと納得するまで、長い時間を考へ込むことがある。

　それと似た不安の念が、ある街角でその少女を見たとき私に逃走の衝動となつて現はれる。私のその不安が夢の現象から尾を曳いてゐるものではないことを私は知る。といふのは、夢が原因となる不安の念は、このやうに現實の出來事から暗示されることは少い。それは多く頁を繰る指の腹の感覺だとか、板の木理の人や動物の姿に似た奇妙な型だとか、壁の穴の奥の暗さ

などが動機となるもので、原因それ自身が非現實的なものであるか、前夜とかあるひは何年か前とかに見た夢の續きをまた夢のなかで見て、二度目の幻影が最初の幻影を現實の遠い記憶のやうに眞實化したときなどに起ることである。だが今私が感じる不安の念はそれよりももつと現實的なもので、根據のある事實があるにちがひない。私はいつたいこの少女になにをしたのだらうか。名も知らぬ、だがどこかで見たことのある、この慘めな、肉體や愛戀の豐かさによつてその苦痛をも感激的なものとすることのできない、樹木のやうに不感受的な年齢で、不幸はただそれの機械的な重壓によつて彼女をうち挫いてゐる少女の顏は、直接私の心象に痛さとなつて傳はる。すると私は氣がつく。どこか樹木がその上でざはめいてゐた壁のあるやうな裏街で、私は自分のなかの彼女の幻影を、そこの路上に虐殺し、內臟を引きづり出して土まみれとしたまま、逃走したことを。いまこの街角で見る少女の恐怖に驅られた顏は、そのときの私のイメイヂのなかの行動を、彼女の顏の表情によつて現實化し、私の想念の慘虐さを一層なまなましくし、そのために靜止してゐられぬ衝動で私を貫き、それから醒めたあともなほ、少女の事實上の不幸に想像上の犯人である後暗い兇惡の動悸を感じるのだ。

ともかくも、私はそこの壁を歩きぬけた。それは通りかゝつた少女に不吉な虐殺の影を投

げ、私に息づまる思ひをさせたところ、ふりかへると、私も少女も立去つた後のその矩形の空間に、樹木の梢のみが、そこに起つた幻覺に不安を感じてざはめいてゐた

私の立つてゐたのは植物園の門であつた。門番の老人は人間であるよりも植物の生理にちかい單純な非理性的な動作で私のために切符を切つてくれた。老年がすでに彼の顏の皺や手足の顫へに現はれてゐた。だが彼の持つてゐる無感動は、彼自身も百年あるひは二百年の齡を重ねることによつて、園內の楡の老木のやうに節くれて枝を張りのばし、水路に沿ふて擴がる芝生の上に書物を開き、あるひは食事をする男女の樣を見下してゐる一本の老樹となる筈だと自ら定めてゐるかのやうである。沈默と靜寂とを信じきつてゐる老人、彼にとつては、沈默も靜止も死の一條件とはならず、かへつて園內での生命の象徵である樹木の無言の同化作用、枝葉の伸展、年輪の增大を意味してゐる。それ故老人の肉體は濕地から水分と榮養を享け、日光によつて同化作用をなし、手の靜脈は葉脈の變形となり、胴體や骨片の斷面は年輪を示す筈である。

私の眼前に展けるのは冷酷な綠色の空間、なだらかな平地の傾斜に添ふて刈り込まれた芝地、梢も見えぬ大樹によつて空から限られてゐる園內である。殘るところなく準備され飾られた人の影もない宴會場に突き出された唯一人の賓客の當惑こそ、今の私のものである。何のた

めに見知らぬ植物等の饗宴の中に入つて來たのか。理由はない。理由なくして物事をしてゐる今日の私の空虛な頭腦。そのとき私は明綠の芝生の上の陽光に眼を細めながら突然今迄のながい夢想の時間に入る前の自分を思ひ出した。私は前後を見まはす。誰に見られてゐる譯でもなく私は身慄ひする。いま少しで、あるひは、と思ひ、私はまつしぐらに植物園を出て、また風蔭の壁に沿ふた砂利道を戻る。さつきの少女の通りすぎたあたりで、私は靴が蝸牛か雨蛙でも踏みつけたやうにぬらりと滑つたのを感じて、下水の緣石まで歩み寄つて靴底を幾度も擦りつけた。それでもなほ粘液がねばねばとしてゐるやうなので、私は草の上にそれをなすつた。それから後をも見ずに角を曲り、賑やかな人込みの中にまぎれ込んで始めて私は安らかさに戻つた。すべてこれ等のいまはしい觀念、慘虐な思考は、今朝受けとつた一通の手紙から發してゐたのである。それなくば私もまたこの都市に於てはこの一日を成熟した季節の日光を浴び、街路樹を、歩道を、はためく店々の日覆ひを、風物を、享受してゐて宜かつた筈なのだ。平穩な幸福は騷がしく驅ける電車と自動車の警笛のなかにある。思惟を祕して外貌を彼等のなかに目立たせてはならぬ。さうすれば何人も私の中の汚醜を知らずに私の前を歩み後を歩みつづけるだらう。

その手紙は、星と少年との外の何物をも筆にすることのできぬ童話作家の、誰がこんなことを豫期するものか、突然旅先から私に宛ててよこしたもので、ぎりぎりと私を切り刻む言葉で一杯になつてゐたのだ。ではその彼は何者か？　常に他の面前では自己を表白できぬおどおどとした退嬰人、救ひ難き卑屈な微笑、何ものをも承認すべく待ちうけてゐる弱氣、かつて友人が惡戲に取り去つた椅子のあとに尻をつき、皆の洪笑と床の汚水のなかに、これは可笑しい、これは可笑しいと慘めな笑を笑つた男。彼はあらゆる時のあらゆる出來事をとほして私に付きまとふのであつた。決してそれは私を好いてゐるからなのではない。絕えず私にぐさりと刺され、嘲笑され、彼の仕事のすべて無駄なることを指摘され、その存在理由を否認されんがために、私の買物の包みに手を出し、私の茶に砂糖をとり、下僕のやうに私の表情を窺つてゐるのである。彼の顏を見るやいなや私は仕事を投げ出し、肉感的な喜びをもつて彼を傷け始めるのである。遠まはしの諷刺の齒がゆさにいら立つて、私が露骨に壓倒的になればなるほど、彼は哀れつぽくにやにやと笑ひ、手をもみ、伏目になり、哀願する犬のそれのやうな眼をする。そして最後に彼は下顎を下げてがつくりと疲勞してしまひ、意氣込んでゐたにちがひない要件をも告げずに立ち去るのである。だが忽ちまた彼は現はれる。如何に愚劣なことでも私に告げね

ばならないと考へればそれを私に告げるためには、立去つて行つたときの自分の表情も忘れたかのやうに、いそいそとやつて來る。

いま私は旅先にある彼に煩はされることなく、置き忘れた書物ほども彼を思はずにゐたとき思ひがけず彼の手紙を手にしたのである。あの手紙を書いたのは果して彼自身なのであらうか。私は人の中を歩きながらその手紙を身のまはりに持つてゐないことを確かめるため着物に觸つて見る。幸にして私はあの呪はれた手紙を持たずに來た。だが彼の咬みつくやうな語句は私の肉體の中を、落付く場所を見出せずに驅けまはり始める。『君は如何なる權利があつて僕を友人間の笑ひもの、道化、幇間だと決定したのか。僕の不具な性格を皆に觸れまはつた最初の人間が君であることに就ては僕は確證を握つてゐるのだ。』さう書いてゐたのはたしかに彼の誤解である。私が知つたとき既に彼は皆にさう認められてゐたのだ。勿論私が彼に就ての笑ふべき新發見を仲間に發表して自分の眼を誇つたのは事實であるが。だがそれが私の言葉と異つてゐるとしても私の行爲は彼がそのやうに私を考へてゐることを不當なりとなし得るものでない。いや僕が最初では絶對にない、僕のは三度目か五度目で、あの時に椅子を引いたのは誰だし、それから帽子を隱したのは誰で、僕はただそれに就てかくかくの戯談を言つたのだ、だから僕は

決してなにも最初に君を、本當に僕は眞心から、などと彼に向つて辯解する自分をふと考へて見て、私は赤面し、全く抵抗の不可能なのを知つた。彼のやうな人間は思ひ込んだら決して考へ直すことはないし、又私がそれを全き寃罪だなどとは決して言ひ得ないからである。それからまた彼の手紙は續いてゐた。『たうとう僕はこの手紙を書きはじめた。最初の一行が死ぬほど僕をいら立たせた。だがもう何でもなくなつた。お望みとあればいくらでも僕は書いて行けるんだ。なるほど僕は君の意のままに輕蔑され、哀れまれ、足蹴にされてしかもなほ君から離れることができなかつた。だが君が僕に尊敬されてゐるとか畏れられてゐるとか、またそんなこともあるまいが、萬一にも好かれてゐるなどと考へてゐたならば、お目出度いともなんとも言ひやうのない話だ。僕が毎日君の家へ行つた理由か、そんなことを僕が知つてたまるものか、理由なんか糞喰へだ。だが如何に君がいい氣な男にしてもだ、いつかは何かの拍子に、僕が躍りあがつて卓を叩き、君がどんなに破廉恥な男であるか、惡德漢であるか、老獪な男であるかを、皆の面前で喋り立て、君の尤もらしい面の皮を引ん剝くやうなことをやり出すかも知れないといふこと位は察してゐただらう。だから君は、嘲笑的に僕をやつつけたかと思ふとその次には僕の作品を褒めあげたり、上から出て僕を威壓しようとしたり、色々な藝當をしてゐ

たのだ。』またしても、彼は自分に都合のいいやうな揑造をしてゐるのである。私は彼の作品を良いと言つておだてたことなどは一度もないし、彼が立ちあがつて戰ふだらうなどと想像したこともない。だが、待て。この手紙を書いたことは正に立上つたと言はるべきだが、これは不明にも私の夢想だにし得なかつたところである。それなのに彼が喋り立てるつもりだつたとか、それを止めさせるために僕が種々の藝當をしたなどと書いてゐる處で私は全く足をすくはれた。私が氣づいてゐたと否とに拘らず、私の態度はそのとほりであつたに違ひなく、私も彼もいつか二人の間になに事かが起きることは自働的に豫期してゐたらしいのである。それでなくて、あんな無鐵砲なバランスのとれない關係が二人の間にいつまでも續けられるとでも思つてゐたのか。嘘だ。私も豫期してゐたにちがひない。だが、あつ、と私は氣づいて、危く人込みのなかで叫びをあげようとした。彼を引きまはし恥しめて掌に乘せてゐた筈の私が、掌に乘せられてゐた彼よりもその事情のバランスを感知することができなかつたではないか。それを考へて私は息苦しくなり、無意味に魚のやうに口を開いて見、また閉ぢた。そして髪を搔きむしらうとして危くやめ、立ちどまつて周圍を流れてゐる人の群を見まはした。『君は言ふまでもなくイカルスの傳說を知つてゐる。僕が知らないと思つて得々と僕に說明したのは君だか

ら。君がその說明をしてゐた間、僕は嬉しいと言ふか、滑稽だといふか、感動してじつとしてゐられなくなり、それこそ君そのものだと言つて怒鳴りたいのをやつと我慢してゐたものだ。勿論イカルスのモテイフは肉親の悲劇にある。だが君の場合ほどイカルスが笑止なものになつたことはないんだ。イカルスは兒戯の失敗だ。だが君のは兒戯の兒戯の兒戯の破滅だ。これは僕が言ふんぢやない、君が閉めてゆくすべての扉の後で起る言葉なんだ。ちよつと知らせておく。』それでイカルスが乳色の海に落ちたイメイヂが始まつたのだ。イカルスは石のやうだ。それは多分遙か天空から落ちて來たのでこぽりと音を立てて水中に沒したきり二度と浮きあがらなかつたのだらう。だが彼が私に痛からうと思つて書いたイカルスの挿話のみは奇妙にも私に媚びるのだ。そして擊たれた筈の私はにやりと笑つてゐたのである。尤もそれは幾度目かに鞭打たれるものの鞭を見るときにする微笑ではあつたが。何故ならば、このことは私自身が生々しく感じてゐたところであり、他人に言はれてゐる事を知つてゐたところであり、そこは私にとつて決して新しい戰場でないからだ。彼にイカルスの悲劇を說明したとき既に私は嘲笑を藏してゐた。それに關してならば私はそつとして置かれる權利がある。そこまで思ひ出したとき私は始めて自分の脚で立つてゐるのを感じて息をついた。『僕は當分そちらへは出て行かな

いつもりだ。だが僕は此處にゐても君の仕事には皆眼をとほしてゐる。待て、それを已惚れることはない。君の仕事に眼をとほすと書いたのを讀むときの君の眼の動きを僕はちらと今考へて胸を惡くした。この言葉は、どこで誰が何のために言はうとも君はにやりと笑ひかけるのだからね。でもそれが本當は僕になんの關係があるだらう。ただ僕の言ひたかつたのは、僕は自分の表情を即座に君の氣持の鑄型にすることができるほど君を知り拔いてゐることだ。なんのためにこんなことになつたのか。呪はしい話だ。僕は今でも、あらある君の表現から汚らしい卑劣な醜惡なもののみを選み出して、そんなものをあてに生きてゐる君の性格を輕蔑せずには一日も自分の日を送ることが出來ない。僕が自分を君の好き勝手に踏み躪らせながらも毎日君に逢はずに居れなかつたのは、何時かは僕のなかで何物かが爆發して君に宣言するのを待つためだつたのか、それとも君の背德的な處を次から次からと見出してゆく喜びのためだつたのか解らなくなつてゐる。今でも君の仕事の中から一つでもさういふものを見つけることが飛び上るやうに僕を滿足させるのを見ればそれは後者のやうでもあるし、たうとう僕がこんな手紙を書いてゐるのを見ればそれは前者のやうでもある。』ある日、彼は私の非常に好機嫌なときに來合はしたので、街のレストランで私は彼に晩餐を奢りながら、何が故に彼の作品がすべてい

んちきであるか、彼の童話のどの行は誰の作品の何處にある文章であり、彼の話の筋はどの外國作家のどの作品と偶然にも同一であり。女主人公の名前はどこのレヴューの踊子の名であり、その題はどの映畫の題と下の半分が似すぎてゐる等と指摘し、それを聞いてゐる彼の弱々しい反應のない顏を見てゐるうちに私は一層いら立つて、どんなに彼の作品がよく書けてゐても、(この言葉を彼は忘れずに、これだけを切り離して覺えてゐたのかも知れぬ)彼が今のやうな態度で友人の間を次から次からと訪問してまはり、一々尻尾を摑まれて歩いてゐるやうでは絕對に傑作の生れる譯がない、と眞向からあびせかけて煙草に火をつけてゐると、彼は突然『それは晩餐代ですか』と言つて、なほなにか言ひ殘したやうに唇をひくひくと動かしながら、私がかつて見たこともない傲慢な表情を閃めかせたことがあつた。その言葉はいつまでも私のなかに惡い後味のやうに引掛つて殘りそれから後私が彼を愚弄するときには必ずその言葉がよみがへつて來て、その無禮な一語を踏みにじり彼の中にひそんでゐるそんな態度を殘る處なく粉碎して了はうとして、私は夢中になつて言ひまくるのが常であつた。こんな言葉はその後彼も發したことがなかつたが。それから彼はまた何とか書いてゐた。私はなほその續きを思ひ出さうとするやうに立ちどまつた。私の氣持は殆ど自棄に近く、もうこの手紙の反芻は澤山だと

叫びたいほどになつてゐた。自分が意氣地なく精神的な疲勞に敗北したのを知つてゐた。私は顏面筋肉がだらりとぶら下つてゐるのを感じた。激しい疲勞が歪められた私の自尊心を襲つた。何とでも書くがいい。そして表情が彈性を失つたのとともに、私の精神も反應が鈍くなつて、何とでも書くがいい、とか、そんなものをあてに生きてゐる君の性格、などといふ言葉を無意味に斷片的に思ひ出してゐた。何とでも書くがいい君の場合ほどイカルスが兒戯の兒戯の如何なる權利を幇間かその手紙を持つて來ないあれは蝸牛だつたかなにか内臓の木の葉の形をした脾臓だつたか壁のかげにざはめいてゐて彼をいや少女を踏みつぶした場所の蝸牛を彼は私の紅茶の中に入れた君の仕事に眼をとほす、と私はただ機械的に呟いてゐた。私の前を電車が幾臺も幾臺も通りすぎた。先刻から私は安全地帶に立つてゐたのである。私は無駄に自分の精神を統一し、どこかに立ち直る足がかりを見つけようとあせつてゐた。私が、このやうに救ひがたく自分自身の崩壞を感じてゐるのは、彼があの手紙で指摘した私の背德行爲のせゐではない。その大部分は彼が勝手に作り出したもので、取りあげるにも足らぬ程の出鱈目ではないか。そしてイカルスのことは今更彼が書き立てるほどの珍らしいことでもない。AがBがCが、あれを言つたり書いたりして私に投げつけた無數の顏がある。ただ彼があの手紙を書いたとい

ふこと、私がその中に少しの意力も認めようとしなかつた彼が、こんな思ひがけない時に背後から私に罵聲をあびせたこと、ただそれだけが私を耐へがたくさせるのだ。いや裏切りだ、あいつは變質者だ、恐らくあいつは氣が狂ひかけてゐるのだらう。あれは思ひちがひが度を過したためだ、などと私は考へようとする。だが私自身はこんな抗辯がみな嘘だらけの、間に合はせであることを知つてゐる。そんなことぢやない。ある人格を完全に踏みにじつたといふ征服感に無意識に胸を張つてゐながら思ひがけず相手に足をさらはれた慘めさが、今の私の醜さなのだ。私はその自分の姿を正視することが出來ないのだ。私は自分を逃亡し、彼の手紙のことを忘れたい。私が白痴視してゐたあの彼からこんな手紙を叩きつけられたことがもしも嘘であつたら。さうしたら私が漠然と眼に浮べてゐたあの曇つた海上のイメイヂだつてもつと變るだらう。たとへばあの水平線がどちらかに傾斜するとか、魚がぴよこりと水面を破つて顏を出すとか、靜止したやうな帆影がいつか隅の方に現はれてゐるとか、ああもしさうだつたら私の想念はどんなにか樂しく、生々として動くだらう。だがあの灰色の海と曇つた空のイメイヂは私の頭にとりとめもなく停滯し擴がつてゐて、私にフェイタルな行きつまりを感じさせるばかりである。それはイカルスか、イカルスのことを書いた彼の手紙に關聯してゐるのかも知れぬ。

だがその茫漠とした感覺は、私にはもつと古馴染のもので、非常に不愉快な時にはきつと私の心の中に浮ぶものだ。たとへば私が悲しげに泣きながら搖籃から眺めてゐたどこかの海の曇り日の風景が拭ひ消すことも出來なく私の網膜に燒きついて、不愉快な時には必ず現はれることにでもなつてゐるかのやうに。そして電車は次から次からとそのイメイヂの中を通りすぎて行つてゐる。

私は誰かに見られてゐるやうに思ひはじめる。すると、私の前方、電車道の向側のショウ・ウインドウの前に立つて、妙に眼玉の暗い男が私を見守つてゐる。私ははつとする。私はさう言ふ眼つきをする職業の男を知つてゐるのだ。あの男は私の眼に兇惡ななにかを見てさつきから私をつけてゐたにちがひない。用もなく私がこの安全地帶に立つてゐたことだつて疑へば疑はれる譯だ。これは私には二度目である。かつて私は停車場の待合室の片隅に坐つてゐた。私は女に棄てられた後で、殘虐な復讐の方法ばかり考へつづけながら、手脚の戰くやうな想像に憑かれ、周圍の旅行者の愚劣な顏の一つ一つに憎惡を投げつけてゐた。すると一人の男が肥つた頰に埋まつた、前から俺はお前を知つてゐるぞといふ眼で、貴樣のやうな奴を俺は知らんと撥ねかへす私の眼を睨てゐたが、暫くの爭ひの後彼は立ち上つて、來い、と私に頭で合圖して其處

を出て行つた。驚いたことに私はその途端にひよいと立上つてその男の後について行つたのである。そして自分の弱さとその男に對する屈辱とに身を捩りたく思ひながら、物蔭で私はその男の前に立つた。君は何處の者か、職業は何か、金はいくら持つてゐるか、財布を見せろ、とその男は腕を後に組んで私の前を往復しながら問ひ始めたのである。その男が警官だと解つた瞬間に、私は自分が正しく罪人であつたことを感じた。私の抱いてゐた想念は實に犯罪者のそれであつたからだ。彼の言葉は、犯罪と捕縛の現實的な恐怖となつて私をうちのめし、私は惡夢から醒めたやうに彼の前を立ち去つた。その時以來私は自分の想念を絶えず顯はしてゐるにちがひない自分の表情を警戒し始め、人々に曝される自分の裸の眼つきを怖れてゐる。人の容貌から精神を推知し得る者には何物も隱されてゐないからだ。談話はその混亂で話者を蔽ひ隱すことができる。だが不用意に露出される表情は人の存在の完全な說明になる。今また彼の手紙を思ひ浮べてゐたとき私の表情は私の統制力を逃れて、犯罪者の足搔いてゐる、摑まる處を知らぬ、追ひ立てられ、絕望しながらも逃げまはらうとする、あの忌はしい容貌をしてゐたにちがひない。私は犯罪者の資格でその安全地帶に立ち、途方に暮れた逃亡の姿をしてゐたのだ。ショウ・ウインドウの前にゐる男はそこを往復しはじめる。その格好はちやうど停車場の物

蔭で、君の職業は何か、財布を見せろ、と私を横目で見ながら訊問したときの男の態度とそつくりである。あの男は右へ歩き、左へ歩き、私が此處を動かうとする瞬間に眞直に私の處へ寄つてくるのだ。かうしてまた理由もなくつけ狙はれてゐるのに氣付くと、もう私は自分の身體にまつはりついてゐる醜惡さに、一秒も我慢ができなくなつた。勝手にしろ、と私はその男を、手紙をよこした彼を怒鳴りつけてやりたかつた。電車がぎしぎしと止つてちやうど私の前で車掌が扉を開けたので私は何の躊躇もなくそれに乘つた。私の乘つた電車が動き出すときショウ・ウインドウの前の男はせかせかと此方へ渡らうとしたが擦れ違ふ電車にさへぎられて立つてゐた。

馬鹿、馬鹿、馬鹿、と私は身を削るやうに呟いた。これはみな泥沼のやうな精神の消耗だ。いつたい何時終りになるのだ。私のなかに流れ込む外界の、たとへば箱だとか、眞鍮の握りだとか、理髪師の白衣だとか、犬、街路樹、音響、悲鳴、それから顔、顔にしても始めて見た私の外貌から私の生來の卑屈感と肉體の薄弱さとをじろじろと見測つてゐる顔だとか、また私の過去や言語や表情の癖や曖昧な性格や傲慢さなどを皆知つてゐて、またやつてゐるなと言はぬばかりの友人の顔だとか、私が邪惡な思ひをひそめてゐる時にかぎつてお前の考へは知つてゐ

るぞと近づいて來る顔だとか、それ等は私のまはりに押しよせる汚らしい漂流物のやうなものだ。私は胸まで、いや口のあたりまでその汚物に漬つてゐる。これら一切の風景や人間の肉體や顔面はなぜ濾過するために私の性格の歪みを必要とするのか。無邪氣な少女は、樹の葉のそよぎは、なぜ單純にそれだけの意味で私に入つて來ないのか、それ等が私を通して反映されるときにそれ等のものに責任のない醜惡な意味と歪んだ印象のみが私から出てゆくからと言つて、なぜ私は私の表情や眼つきをつけ狙はれなければならないか。いつたいどんな表情をして歩いてはいけないといふのだ。それにしてもあまりに非力なことだ。私はただ不具な屈折をする半透明物で、掴まうとする指から流れて落ちる水母のやうなものではないか、私はただもの憂く街の店々を眼にうつしてゐるのみであつた。だが、今家へ歸るとすれば、あの手紙をどこへ仕舞つてあつたかといふことが、突然氣になつて來た。あれは曳出し、狀差し、本の間、それとも屑籠であつたか、と私は思ひ惑つた。その在處がわかつてゐなければ、あれはまた思ひがけないところから現はれて、鋭利な双物のやうに私を傷けるに相違ない。何よりも先に手紙を置いた場所を思ひ出さうとして私は激しく動搖する電車の速度に苛立つてゐた。

假面

靴の紐を結ばうとして椅子の上に屈んだとき大伴が話し出した言葉を聞き、私はどきりとしてそのままの姿勢で耳を澄ました。

『おい、珍しい話があるんだ。僕は最近西木の妹の綠さんに逢つたぜ。』そして彼はその次を言ひかけたがためらつてゐるやうであつた。その一語が私に與へた動搖を知つてゐる佐久間の眼を、私は俯向いてゐる自分の頸に感じた。すると私は見られてゐるといふ受身の姿勢に耐へられなくなつて、急いで身を起した。醉がまはつて赤くなつた大伴のぐりぐりする眼を皆が見まもつてゐた。西木は二三年前に病沒した我々の仲間の一人で、その後彼の一家は沒落して四散してしまつたのである。大伴はさうして皆に見つめられると狼狽して口籠つてしまつた。沈默して皆の頭の上で今まで、賑やかに鳴り響いてゐた蓄音機の小唄が終つて、ラウドスピイカアの中で、ことりことりと針をとり替へる音が聞えてゐた。

『西木の妹がどうしてゐるんだ。』と誰かが待ちきれなくなつて尋ねた。

『それあ何でもない事だよ。言つても宜いことなんだが。』と大伴が言つた。その言葉が私に痛くこたへた。私と綠子のことを佐久間は大伴に話したのだ。でなければ綠子がどんな悲慘な狀態にいま居るとしても大伴がそれを皆に言つて惡いといふことは無い筈だ。私は佐久間をとほしての私の愛の告白が綠子に拒否された時の、自分を無慘に他人の前で踏みにじられる屈辱感を、もう一度味ひ直さなければならないのを觀念して胸をしめつけられる思ひがした。皆は大伴がどうしてもそれを言ひ出さうとしないのが解ると、またてんでにビイルのコツプに手を出したり、煙草の煙を輪に吹いたりしはじめた。大伴もビイルを飲みほしながらコツプのなかに自分の表情を隱した。そしてまた意味もなくジヤズの輕い旋律が室に滿ち人々の注意が混亂した。私もその和いだ雰圍氣のなかへ逃れようとして、壁によりかかつて眼を閉ぢた。酒がまはつて來たせゐか、もの憂さが身體ぢゆうに行きわたり、手を動かすのも厭になつた。だが綠子についての記憶を思ひ出すまいとしても、その苦さばかりは私の思考の襞から容赦なく滲み出して來た。彼女の美しさと彼女の聰明さと、それに近づかうとし、それを望むこと、それがそのまま私の屈辱となり自意識の崩壞となつたが、絶對に私の迂廻することも眼を塞ぐことも出來ない肉體的形態のためだと思ふと、考へがそのまま自分をぐさりと突き刺す刄となり、私

自分のした事實から、逃げ出せないやうに縛りつけられてゐることを悟るのみであつた。だが波のやうに壁につき當つては渦卷いてゐる音樂のなかで、私はふと佐久間の低い聲を捉へた。『綠さんはいま何をしてゐるんだい?』眼を開くと佐久間が傍の大伴に身をよせて尋ねてゐる。外の友人等は脚を投げ出したり、議論を始めたりして、もう佐久間と大伴には少しも注意を拂つてゐなかつた。大伴は低い吐き出すやうな調子で佐久間に答へた。彼が何と言つたのかは全く聞きとれなかつたが、とにかく非常に良くない言葉が言はれたのは明かであつた。私はその聞きとれない言葉のために自分が蒼ざめてゆくのを感じた。割合に低調でありながら少しも人の氣持を靜かにして置かない音樂のなかで、大伴の方にうんうんと點頭いてゐる佐久間の横顏を見てゐると、何かとり返しのつかない變化が綠子の上に起つてゐるやうに思はれた。安定を失つた私の神經は歌詞と旋律とのうねりに、思ひのまま持ち運ばれて少しもまとまることができなくなり、押へるすべもなく苛立つてゐた。それなのに私の焦躁に少しも關係なく佐久間は世なれた人間の重々しい點頭きを繰返してゐる。かつて私が綠子への愛情の告白を賴んだのも彼のさういふ世間人的なたのもしさのさせたことであつたのだが、今の彼の態度はその屈辱感を改めて私に强ひるだけであつた。人が理想化した他の人格を自分の中に置き、その人格の一

部分で自分を構成するやうに、私は綠子を自分の存在の一部にしようとした。だがそれが慘めに蹉跌すると、私に戻つて來たのは、更に汚くなつた自分自身に過ぎなかつた。だから彼女に繫つて今佐久間に引出されてゐるのは私の最も見苦しい部分なのだ。彼女の出現は常に私の人格の壞滅に外ならないのだ。しかも彼女の暗い面が私の前で話されてゐるのは私を二重にも三重にも救はれないものにした。私は犯罪者のやうにその場から逃走したい衝動を感じてゐた。

だがその當惑のかげから別な抵抗が起つて來た。彼女に逢はうとする氣持、綠子の今の生活を知り、どんな境遇にゐて、もし私のことを考へてゐるとするならば、どんな風に考へてゐるだらうか。さういふ痛々しい考が傷けられた私の存在をとほして忍びやかに、姿を現はした。私が踏みにじられ私が嘲笑されるといふことは、みな佐久間や大伴に對する交渉から生れることで、彼女に傾いてゆく私の心情はその苦痛の下をくぐつて、なほいきいきと甦つて來るのだ。そして遂には、ひそかに話し合つてゐる佐久間と大伴に配られてゐる私の全身的な注意は、彼等の口調の蔭に翻弄されてゐる私の存在でなくて、その痛さのためにかへつて躍動的になる綠子への執着に變つてゆき、私は湧きあがる身震ひのやうなものをぐつと抑へつけてゐなければ

はならなくなつた。

『全く今度の雜誌は面白い作品が無かつたと思ふ。』と甲高い聲で種田が叫んだ。皆は今まで雜誌のことを論じ合つてゐたらしい。種田の高い聲にも構はずひそひそと語り合つてゐる佐久間と大伴を見つづけることが、もう私をぢつとさせて置かなくなつた。種田の言葉は私の叫び出さうとする衝動に火を點じた。

『さうだ、みんな實に下らなかつた。』と私は自ら抑制する暇もなく喋り出した。自分の言葉の生れた動機が、今まで全く聞かずにゐた議論の途中の種田の不用意な弱氣の叫びに誘はれたものであることに氣がついたけれども、その次の無數の言葉がもう群集のやうに私の口に突つかけて來て、自分ではまだ正體も解らない文學上の惡口や叫びや斷定や嘲笑などを一氣にそこへ叩きつけたくなつた。

そのとき大伴と話してゐた佐久間が、首だけ振りむけて、思ひがけない聲を出した私の氣持を測るやうに私の顏を伺つた。周圍がぼうつとなつて、彼の顏ばかりが一瞬間私の眼に燒きついた。すると彼の眼のなかに憐みのやうな表情がちらと動いた。がすぐ彼は大伴の方へ首をめぐらしてしまつた。感情の沸騰したやうな狀態の中で佐久間の眼にたぢろいだ私の言葉は、秩

序を失つて混亂し、全く制御の及ばないものになつて行つた。

『種田、君の詩が先づ失敗の標本みたいなものだ、ふん。君がいくらしがみつくやうにして書いても、いつたい言葉の感覺を君は持つてゐるんか。君の使つてゐる言葉の一語々々が、誰が十年前にどんな詩で、その前の誰の影響を受けて、でなければどんな誤譯の眞似をして使ひはじめた言葉なのか心得て置く必要があると言ふものだ。でなければ、君がシネマの字幕から印象づけられて來た言葉なのか、今朝讀んだ新聞の見出しと一字しか違つてゐなかつたりしてはしないか位考へて判斷して使はないと、君の詩は街中の看板や賣藥の廣告の繼ぎはぎになりかねないからな。惡いことは言はない。言葉に氣をつけたまへ。君の言葉に。』

私の眼の前で、見る見る種田の顏を彼の弱い性格が隈どつて來た。私は自分の言葉の中途からもうやめよう、もうやめようと思ひながら、常々口まで昇つて來て言はずに置いた毒舌、しかも自分で手にとるやうに効果の解る殘酷な毒舌が飛出してゆく力に負けて、最後までそれを言ひまくつてしまつた。だがその間私は、かつて皆に酷評された私の小說を、彼自身ちつとも良いと思つてゐないのに、たつた一人で懸命に皆の面前で辯護してくれた時の種田の姿を思ひ出してゐた。そしてその場景をとほして私に返つて來る自分の痛さが、增々私の狂暴さを後へ

引かれないものにした。

『勿論、それあ、あの僕の作品は編輯の佐久間君が間に合はせに急がせたものだし、失敗してゐるには相違ない。だがなにも僕の詩の全部が君の言ふやうに賣藥の……』と種田は少しむきになつて言ひかけたが、そこで賴りない戸惑ひが彼の顏に現はれ、彼は私から眼をそらして隣に坐つてゐる牛山を見あげた。だが牛山はゆつたりと腕を組んだまま煙草の煙を吐き出し、眼の前でどんなことが起きても氣にかけぬやうな顏をしてゐた。

『さうか失敗したといふことは君自身も氣がついてゐるのか、』と私は彼の顏を牛山から引き離すやうに疊みかけて言つた。『僕はまた君一人位はあれを傑作だと考へてゐるのかと思つた。それは良い事だ。それあ何よりだ、それでこそ君も藝術家だよ。ぢや君は推敲さへしたらヴアレリイのやうな詩だつて書ける筈だ。それあ書けるよ、なあに、書かうとさへ思つたら。だから僕は君の詩についての今の批評は撤回するよ。あれは發表されなかつたと見なすべき作品だからな。それは兎に角僕は佐久間の小說にも感心しない。佐久間の作品の正體は詩の形式と小說の形式との生溫い妥協にすぎない。それあ一般の小說家には書けないだらう。元來小說家つてのは傳統的に文章の下手なのが、自慢なんだからな。だが二三年も詩をやつたもので小說を

一つ二つも讀んだものなら何時だつてあれ位のものは書くよ。いや、僕はさう思ふ。』

私はつまつて言葉を切つた。だが沈默すると私は言ひ始める前と同じやうに綠子の事件にとり挫がれたままの哀れな自分を見出した。大伴との話をやめて私の言葉に耳をすましてゐたらしい佐久間は、自分の名を言はれると私の方へ向き直つて、まじまじと私を眺めた、すると私は、佐久間の方へ向ける自分の眼が、彼の顏つきから綠子に就ての大伴の話の性質を見定めようとしてゐることに驚いた。だが彼の顏には綠子に就ての話の痕跡が少しも殘つて居ず、ただ彼の作品に加へられた批評へのむき出しの關心が露出してゐた。氣づかれなかつた、と思ふと私は大膽になつて、間違でもあつたら反駁して見ろと腹を据ゑた。そのとき思ひかけず彼の顏ににやりと笑ひが浮んだ。それは複雜な、妙に卑劣な笑ひであつた。私の批評を半分ほど呑み込みながら、綠子のことで私が最も痛い處を押へられてゐる彼に食つてかかつてゐるだけぢやないか、といふ考へかたに變つた薄ら笑ひであつた。その上私に弱味のある動機のために、彼は自分の仕事を否定させるほどの犧牲を甘受してゐるんだぞといふことを言はぬばかりの表情なのだ。綠子のことがなければ自分の仕事を貶されるやうな馬鹿な眼に逢ふ理由がないのだといふ顏つきなのだ。それを見ると私は無闇に腹が立つた。言ふことは言ふだけの理窟があるん

だ。動機とは別だ。自分の弱點のことになるとそれを他人の汚さに託けなければ安心出來ないのか、と言つてやりたくなつた。私は自分の考へかたの我儘一杯なことは承知でしかもなほ腹が立つのを我慢できなかつた。

『もう遲いから出ようぢやないか。』と佐久間はその笑ひを浮べたまま立ちあがつた。

『出よう。』とうるささうな顏をしてゐた牛山がすぐそれに續いた。皆は思ひ思ひに椅子をがたがたとずらし、帽子をかぶつて急な木の階段を下りて行つた。種田がなにか言ひたさうにして私の前に腰かけたまま動かないので、私は暫く坐つてゐた。だが結局言ひ出しさうもないし、向ひ合つてゐるのが苦しくなつて來たので、私は思ひ切つて先に立ち上つた。すると彼もすぐ私に續き、何も言はず階段を下りた。私は脚元が不確かで、知らず知らずのうちに大分醉がまはつてゐるのに氣づいた。種田はいつたい私をやりこめるつもりだつたのか、それとも謝罪するつもりでもあつたのか、と私は思ひ惑つた。すると階段の中途で彼は私の外套に手をかけて引きとめた。來たな、といふ直感で手摺に身をよせて構へながら振りかへると、ひどく困惑したやうな、自分で自分のしたことに慌てたやうな、どうかしたら泣き出しさうな顏をして彼が立つてゐた。

『君、ほら、あの、こないだの譯詩集をね、あれがいるんだが、ついでの時僕の處へ送りかへしてくれないか。』それには答へず、その次に言ひ出す言葉を待ちうけて私は彼を見てゐた。

彼はますます慌てた口調で續けた。

『いや、ただそれだけなんだ。ただあれをちよつと讀みたかつたもんだからね。』そして彼は私を置いて先に下りて行つた。

外へ出ると、霧の濃い、物音のよく響く、おだやかな夜であつた。鋪道に面した暗い酒場からは蓄音機の軋る音に混つて女の笑聲が溢れてゐた。絲と赤のネオンサインの車輪が街角の屋上でぐるぐるまはつてゐた。皆は街角に集つて私と種田とを待つてゐた。なにか私と種田の間に起ることを豫期してゐるやうな、私のことを話し合つてゐたやうな調子を、彼等の身の寄せかたに私は感じた。彼等の立つてゐる處へ自動車が二三臺寄り集つてきた。私がそこへ近づくと、大伴は私には挨拶せず、自動車に片足をかけながら佐久間に向つて『ぢあ僕は歸るぜ』とうなづいてゐた。それが二人の間にとり交はされてゐた話の最後の一語であるにちがひなかつた。自分がいつでも彼等から眼を離すことが出來ずにゐるのに氣がつくと、私は大伴と佐久間から顏をそむけて、水鳥のやうに街の上を流れて歩く自動車や、私に突き當りさうにして行き

すぎる酔つぱらひや、鈍重に動いたり止つたりしてベルを鳴らす電車を茫然と見てゐた。
『ぢや失敬』と佐久間の聲がした。見ると皆は私には構はず佐久間と握手したり彼の肩を叩いたりして大伴の自動車に乗り込んだ。その自動軍が走り去つて行くのを見送ると、佐久間は眞直ぐ私のところにやつて來て、ポケツトに突つ込んでゐた私の腕に手をかけた。『おいもう少し歩かう。』と言つて、彼はぐんぐん私を引張つて人込みのなかを歩き出した。脚がふらふらするので、私は彼のわざとらしい態度にまかせて彼にもたれかかるやうにしてゐた。佐久間は賑やかな狹い酒場街をぐるぐると廻つて、端れの奇妙な薄暗い感じのする酒場へ私をつれて行つた。
『もう少し飲んでもいいだらう。』と彼は命じた酒を私の前に置かせて、女たちと冗談を言つたり、時間を尋ねたりしてゐた。そして時々ちらと私の醉つてゐるのを測るやうに私の方を見た。何か言ひ出す機會を待つてゐるやうな彼の態度が、また先刻彼の微笑を見たときと同じやうな苛立たしさに私を追ひ込んだ。それに酒の醉が私を抑制させなくなつてゐた。
『君が半歲振りに書いた作品があんなものだとは實に驚いたね。』と私は喋りはじめた。『僕はさつきだつて何も君を怒らせようと思つてあんなことを言つたんぢやないんだぜ。さうだ、

君は勿論あれに同意する譯はないさ。君はさつきも承知出來ないと言ふやうな顏をしてゐたね。さうだよ。僕は知つてゐるんだ。いや、なにも、君があれに同意できなかつた理由を僕は言はうとしてゐるんぢやない。だがとにかく僕は自分の言つたことに就ては責任を持つんだ。なるほど、君の作品の惡口を言ふものは一人だつてゐはしない。それぁ君の人德の致すところさ。君は人に惡口を言はせないやうな人柄なんだよ。だが皆が君の書くものを本物だと思つてゐると考へたら大間違だぜ。こんな失敬な言ひかたを赦してくれたまへ。僕は少し醉つてゐるんだ。それからまた、僕があまり人に惡口を言はれ續けてゐるからこんなことを言ひ出すのだと思ふならばそれぁ君の勝手さ。』
私は盃をとりあげて一氣に飲みほした。佐久間は私に酒をついでゐる女の手を見ながら、
『この男は醉つてゐるんでね。仕方がないんだよ。いつもはからつきし意氣地が無いんだが』と言つてゐた。だが私には彼の表情がひどく堅くなつて來たのが解つた。『勿論僕が惡口の言はれどほしな位は心得てゐるよ。だが僕は平氣だ。それを負け惜しみだと思ふのもまた君の勝手だが、とにかく僕は平氣だ。だが君のやうなものを書いてゐたならばだね、惡口を言ふつもりなら一言で根こそぎにしてしまへるんだぜ。その一例がさつき僕の言つたやつさ。つまり詩的

に書かれた散文だ、と言ふ一句で澤山なんだ。すると君はすぐそれを嫉妬だととる。だが、その中に僕の嫉妬が入るからそれが嘘だとはならないぜ、今だつて僕がこれを言ふ動機を君がどうとつてゐるか知らないが、僕は言ひ出してから後のことは動機なんかに動かされあしないからね。とにかく僕と較べて君の仕事にはそいつが無いのに、僕は絶えず失敗ばかり繰り返してゐる。だが僕の失敗の歴史をひつくり返さなくても話は濟むからな。君が四五年も詩を書いて來てだね、今日君の書いてゐるやうな美しい散文を書く。それは勿論立派なことだが、その次を書いてくれ、その次のなにかを。』

私は無闇に喉が乾いてまた盃をとりあげた。酒は苦いだけであつた。そのとき彼が眞面目な顔になつて低い聲で言ひ出した。すると私は急に意氣地なくなり自分に宣告される怖ろしい言葉を待つ子供のやうに、あるひは急所を言ひあてられた狂人のやうにおどおどして、全く抵抗力を失つてしまつた。

『いや、君のその批評は有難く思ふよ。全く僕の仕事に就ては君の言ふのに間違がないんだ。それはまあそれとしてだね、ちよつと君と話さなければならない事があるんだが。』と言ひかけて酒をとりに女を立たせた。『さつき大伴が綠さんのことを言つてたらう。君はもうあの人に

逢ふ氣持は少しも無いかね。ただ居處が解つたといふことだけで、君のことなんかなにも言つてないんださうだ。もし君にさういふ氣持があればだね、簡單に逢へる處に居るんだから。』

彼はふり返つてカウンタアの上にかかつてゐる黑い木製の時計を見上げた。私も思はず彼につられて時計を見た。十二時五分前であつた。『どうだい。』と彼は穩やかに言葉を切つた。

すると、佐久間が私にこんな話をする場面が、自動車の中の友人等の頭に浮んでゐる筈だ、といふことを私は思ひ出した。もう行つてるぜ、と誰かが言ふ。皆は、誰も同じことを考へるものだなと思つて、微笑する。中の一人が、うふ、と聲を立てて笑ふ。一番最後に乘つた種田は横向にスペアシイトに腰かけて、ぢあそんなことだつたのかと考へ、憐れみと苦笑ひのなかに私の興奮した顔を思ひ浮べる。大伴は自分の言ひ出したことから始まつたこの事件を、佐久間がどんな風に處理するかなどと色々の順序を描いてゐる。その彼等全部の作つた映像を打壞してやるといふ快感がしびれるやうに私を襲つた。

『綠さんのことか。だが僕はあの人に拒まれたのだから絶對に逢ふ必要は認めないよ。それに知人に見られたくないやうな仕事をしてゐる人を驚かさない方が親切といふものだ。その話はやめにしようぢやないか。』だがさう言つてゐるうちに、此處は綠子のゐる處に非常に近い場

所だなといふ考が私に閃いた。また佐久間が時計を見たことで彼女の仕事の性質を判斷出來さうな氣がした。するとこれから後幾夜も續けてこの近くを歩きまはつてゐる自分の姿が私の眼に見えて來た。

『さうか。ぢやその話はやめようか。』と言つて暫く彼は椅子の脊によりかかつて默つてゐたが、『だがもう時間だから歸らう。』と女を呼んで拂ひをし、その酒場を出ながら、『でさつきの話だがね。君の言ふとほり僕の文章が綺麗すぎるとするね。だがもし綺麗だつたらどうしてそれがいけないのだい。君自身だつて前には綺麗な文章を書きたがつてゐたぢやないか、綺麗なら綺麗で汚いよりはいい筈ぢやないか。僕は一種の人間凡庸主義者でね。人間の積極的な判斷力なんてさう差異のないものだと思ふんだ。五なら五だけの物の見方の出來る人間が二人居てだね。一人が他よりも良い文章でそれを現はせるとしたら僕は惡い文章で書いたものよりも、それの方が優れてゐると思はざるを得ないね。』と彼は、足元のふらふらしてゐる私を抱えようともせず、こつこつとコンクリイトの上に靴音をさせて歩きながら言つた。その言ひかたには妙に私の癇に觸はるものがあつた。私は理詰めにする餘裕もなく飛躍してそれに應じた。

『ぢや、君は、君と同じ位の觀察力しか持たず、しかも君より惡文家なのが僕だと言ふんだな。』佐久間は眞直前を見ながら同じ調子で答へた。

『君は醉つてゐるから困るんだが、思ひ當る節があつたら仕方のない事だよ。』私はぐいと彼の腕を捉へて私の方へ振り向かせた。

『貴樣は俺を侮辱するつもりか?』

『何?』

『さうだ。それにちがひないぢやないか。』私は自分の身體が思ふやうに動かないのを感じながら、私よりもずつと脊の高い彼に打つてかかつた。彼はあまり相手にもせず、私の腕のつけ根を摑んで抑へつけようとしたが、踏み外して片足を下水へ突込んだ。その拍子に私は彼を押し倒した。だが忽ち私は物凄い力で組み伏せられてしまつた。

『おい聞きたいなら聞きたいと言へ。』と彼は私の上へ大きな眼鏡のある顏を持つて來た。『いつまでも愚圖愚圖と絡んで來やがつて。やい、聞きたいだらう。あの女が何處に居るか言つてやらうか。どうだ連れてつてくれと言へるか。言へるなら言つてみろ。』

『何を。』と私は自由になつてゐた右の手で力一杯彼の頰を毆りつけた。眼鏡が飛んで行つた。すると私は彼の拳が目茶苦茶に私の上に打ち下されるのを感じた。

羊り睡

氣がつくと私は佐久間の肩に擔がれて歩いてゐた。そこは全く人通りの絶えた街で、ことりとも自由でなかつた。私の眼の前を屋臺の眞赤なセルロイドの提灯が過ぎた。その中で誰かが、ごほんと咳をした。遠くを夜警のまはつてゐる音がした。『こつちだわよう』とどこかで女の呼ぶ聲がし、かたかたと走る下駄の音が響いた。白い小さな犬が近よつて來て私の足のあたりを嗅いでゐたが突然激しく吠え出した。『しつ』と屋臺の中で呼ぶ聲がすると、振りかへり振りかへり吠えながらそちらへ驅けて行つた。腕の感覺が無くなつたやうに思つて私は身動きして見た。『おい氣がついたか』と佐久間が下から言つた。『うん』と答へただけで、また私は彼の廣い背中に頭を横に押しつけた。『もうすぐ車に乘せてやるぜ』と彼は私をずり上げながら言つた。

私たちは眞黑に聳えてゐる百貨店の側面に沿つて歩いてゐた。地下室へ下りる踏段の鐵の欄干が見えた。角を曲ると急に風が吹いて來て佐久間は暫く立止つた。光を消した巨大な建物の六階か七階のあたりに眞白く光つてゐるまるい時計が浮き出してゐた。私の眼を射て遠くから驅け寄つて來た自動車のブレイキをかける音がきいんと靜まつた夜更けの街に反響した。

Dion Clayton Calthlop の短篇より

僕の前に土堤がある。その上に坐つてゐる一人の老人。何といふ年とつた、日燒けのした、白髮の、古風な老人だらう。苦のやうな顎髯。苦か、ぼたんづるみたいにもぢやもぢやと縮れて、特別に白い部分はぼたんづるの花を思はせる。老人の服は茨に日光と風を通したやうなデザインだ。傍に曲つたステッキが置いてある。老人の坐つてゐる土堤の前方に、垣根があつて原つぱの方まで續いてゐる。その垣根には一箇所、毀れて穴があいてゐる。僕は老人に話しかける。(今年のケント州の小麥生產高は、統計上昨年のそれより非常な減少を示してゐますな。いつたい政府は殖民地小麥の輸入稅を、ソヴエト・ロシアや米國の小麥の輸入稅よりも二十パアセント低くすると言明してゐますが、それだけでこの急激な價格の騰貴を……)すると老人は無愛想に野原の方を見ながら、(まあ、さう興奮せずに、此處では少し居睡りでもした方が宜い)と言つて、相手にならない。(居睡りですつて?)と僕は言ふ。僕は居睡りどころ

かすばらしく頭がはつきりしてゐるのだ。何時もより眼がよく利くので、默つて坐つてゐても、草の葉の露には、ひとつひとつフェアリイの眼の映つてゐるのが見える。實に何萬といふ瞳だ。また腰の大きな蜂が附近の樣々な花に手紙を配つてまはり、花が返事をしないのに、獨り言をしてゐるのが聞える。(けふあなたの所は、この葉書だけですよ。これは持つて行くのですね。この花紛はどの花に屆けるのですか。)ヒイスの樹の根元の兎は、坐つたまゝ髭をひねりあげ、欠伸をし、欠伸をし、また欠伸をする。偉大な、肥滿した蝦蟇は、スカンポの葉蔭に眠つて、その鼾で蜘蛛の巢をゆすぶつてゐる。(あんたも)と老人は言ふ(すこし睡つた方が宜い。)だが僕は星の奴が空で話し合つてゐるのが聞えるほど頭がはつきりしてゐるのだ。僕は言ふ。(とても睡れやしない。)老人は頭をまはして僕の方を見る、澄んだ青い眼をしてゐる。そして灰色の髯を動かして微笑みながら、(睡むたい、夢みたいな子守唄でも歌つてあげるかな。)僕は怒つてしまふ。(もう澤山だ。このおいぼれの、もうろくした、シミに食はれた骸骨め。僕は睡れんのだと、たつた今言つたぢやないか。)すると老人は寢床の中の赤ん坊に言ふやうに髯の中で呟く、(睡つて、しびれて、鼾をかくのが一番だよ。)そこらぢうの者はみんな眠つたやうだ。蜂はもう居ない。兎は片耳を立てたまま圓くなつて夢をみ、垣根のすひかづらは薔薇

の花の上でこくりこくりとやつてゐる。僕はいらいらしてそれ等を見まはしてゐる。僕の神經は、殘酷なほどの明瞭さでぴりぴりしてゐる。僕は乞食の仙女が尺取虫と寢るために物置の方へ行つたのも知つてゐる。蜘蛛の紡績機の音が鋭く聞える。（とても駄目だ。）と僕はあきらめる。

老人は落ついて立ち上り、脊伸びをして、微笑む。そして案山子のやうな恰好で垣根の毀れた穴の所へ行つて向ふへ聲をかける（さあ來ても宜いよ）。すると、その穴から小さなやさしい鈴の音が聞えて來る。一つ、二つ、三つ、十。それから數知れぬほど澤山の、微風に搖られる銀の鈴の音。僕は考へる、（死んだ叔母さんの話のとほりだ。羊が僕を睡らせにやつて來たのだ。あれは睡り羊だ。夢の羊だ。あの羊を僕はどうすれば宜いんだつけな。さうだ、數へるのだつた。）僕の前に一番目の羊が出て來る。僕は言ふ。（一匹。）羊は叮嚀に頭を下げて言ひ始める、（妾の話つて、つまんないんですけど、とても悲しい話なの。）僕は叱りつける。（お馬鹿さん、さつさと、向ふへ行つて、それからおしやべりをしなさい。）すると羊は悲し

げに僕を見上げて、（ええ、その頃は、妾の毛だつて雪のやうに白かつたのよ。あなた雪を知つてらして？　だまつて踊りながら降つて來るものよ。あれは天使さんたちがお寢床をつくるときに降るのですつて、羽根蒲團よ。おわかりになつて。でも誰かは、あれは、昔の、昔のお婆さんが鷺鳥の毛をむしつてゐるのだつて言ふわ。妾の主人のメアリイは良い子でしたの。ある日妾は、メアリイについて學校へ行きましたの。面白かつたわ。メアリイはきもんの縫ひかたを習ひましたわ。）（きものだらう。）と僕は直してやる。（いいえ、きもんですよ。）妾は何處へでもメアリイについて行きましたの。ああ、メアリイはなんて良い子だつたらう。あなた、子供とマカロニとどつちがお好き。妾は煮たはさみ虫より蝦の方が好きですの。でも、そんなこと、餘計な話だわ。妾が仔羊の頃、ある日學後へメアリイと一緒に行きましたの。お退屈なすつて？　どうもさうらしいわ。でも續けませう。お裁縫のある日でしたの。そしてメアリイは脊中にもたんのあるきもんを縫ひましたの。）（ぼたんだよ。）と僕は腹を立てて言ふ。すると羊はもの憂さうに、（もたんでせう。あなた睡くなりまして？）（いや、とにかく向ふへ行つてくれ。）と僕は大きな聲を出す。（でもそんなきもんは變でせう。それで妾、子供たちと一緒に笑ひこけましたの。妾はその頃本當におとけい者だつたわ。）（君が時計だつて？）と

僕はいらいらして言ふ。（ええ、妾かなりおとけい者だつたの。みんなで可愛がつてくれて、まあこの仔羊さんたら、なんて言ふのよ。それに先生が、）（ぢや先生も居たんだね。その學校には。）と僕は皮肉に言ふ。（へんせいよ。）（さつきは先生と言つてたぢやないか。）と僕は羊に土塊を投げつける。（いいえ、あんた。それはへんせいと言つた方が宜いのですわ。トレミイ・ウイルキンスンつて名で、怒つた時つたら、血の登る梯子つて、あんな人のことでせうねえ。）（君は、おかしな、肥つちよの羊だね。とにかく向ふへ行つてくれ、向ふへ。後から來るほかの羊さんたちをお通しよ。みんな君みたいに長つたらしいゴシップを持つてゐるんだらう。）（ええ、みんなおしつぽを持つてゐますの。ああ、妾たちの羊飼ひの娘さんは何處へ行つたんでせう。妾たちを見えなくして、ツケタアさんは困つてゐるわ。ツケタアさんは、本當の名はミイなんですけど、妾たちがそれにツケタアと言ふ綽名を足しましたの。テイケタア農場の娘さんだからよ。ツケタアさんたら、空想するほかに何も能がないの。妾の昔の主人のメアリイとはとても違ふわ。ミイつて名は妙でせう。支那人のやうぢやなくつて？）

僕はもう我慢が出來なくなる。（おい君。僕は此處へ睡りに來てゐるんだぜ。そんな譫言を聞くためぢやないんだ。人に能が無いとか、ビスケットを食べたとか、羊を勘定したとか。ちえつ、何時までも睡れないぢやないか。）（ではね、何も考へないでお睡り羊、お睡り羊と繰返していらつしやい。それから種子のところをとつて半分に割るとお終ひになるわ。）と羊はねむたげに呟く。（氣狂ひになるよ。）（いいえ、メアリイは氣狂ひではなかつたの。ある日學校まで行きましたら、あ、このお話しましたわね。）（耳にたこが出來さうだよ。）すると羊は氣の毒さうに（だつて妾、この話は何千も何萬もの人にお話して喜んで聞いて頂いたのよ。みんなこのお話で睡りましたわ。睡れない人つて、隨分あるものねえ、妾なら何時だつて睡れてよ。あなたは？）僕はもう絶望的に叫ぶ。（肉屋の親父さん、こいつを賴むよ。）羊は微笑んで、片眼をつぶつてみせる。（肉屋行き？ そんこと怖くありませんわ。誰でも、さう言つて威かすのよ。でもやつぱり妾たちを勘定してゐるうちに睡りこみますわ。）（二番目の羊は、）（三番目の羊はノアの箱船に乘つたんですわ。古臭いんですけど、面白いお話をしますの。あなたはきつと好きになれてよ。ノアが使つてゐた洒落をとてもうまく眞似ますの。妾たちはずつと昔のことも知つてゐますわ。）（ぢや君は向ふへ行つて、次の羊さんたちの話を伺はせてく

れませんか）と僕は叮嚀に賴む。（四番目はぴよんぴよん羊ですの。）と羊は落ちついてしやべり續ける。（ぴよんぴよん兎の間違ひだらう）僕はさう言ひながら、今後は自分の聲がずつと遠くなつたやうに感じる。（ぴよんぴよん羊つたら、ライオンのやうな元氣で飛び込んで來ますの。でも出て行くときは仔羊のやうにおとなしいのよ。とても變るでせう。それはたいていお天氣のせゐですわ。あなたいゝお天氣と胡桃とどつちがお好き。メアリイは學校が大好きでしたの。それから學校では空氣饅頭のこさへ方を習ひましたわ。）

氣がつくと、僕はこくりこくりとやつてゐる。眼蓋が重く下つてくる。羊は何哩も先に居るやうで聲がよく聞きとれないのだが、僕は叮嚀に尋ねる。（空氣饅頭はどうして造るのですか。）すると羊は息をいつぱい吸ひこんで頰をふくらまし、それをぷうつと吐き出して見せる。僕はもう一度こくりと點頭いてつぶやく。（空氣饅頭か、ああ、そんなものはどうだつて宜いや。）野原一面が氣持よく、暖く、愉快になる。羊が立ちあがつて、ゆつくり歩いて行くのが見える。傍で老人の何か言ふ聲が聞える。すると何千といふ羊が、垣根の穴からぞろぞろと出てくる。僕は數へはじめる。（二匹、三匹、四匹、五匹、……）そして僕は睡りこむ。

路環循の綠

文散るあの韻頭

★

現實は彼女の夢を完成するためにある。彼女はその夢をひとつも人に話さない。それに、弟が死にかゝつてゐる。弟を待ちくたびれるペリカンの赤い欠伸。將軍邸の衞兵。雨に濡れた葉裏に眠る昆虫。雲から釣り下げられた天使等の搖籃。

★

航海長のナプキンの海圖。コツクの薔薇のやうなネクタイの前で笑ひ崩れる若い夫人。笑ひかたを知らぬ粘土細工の少女。鯨群の丁字形の尾に圍まれて航路を失つた一等客船。港は幾日も白く坂が光つてゐる。稅關署長は朝餐の卓でチイズを切つてゐる。

★

夜が停滯し、星群は旋廻し、發光虫群の大移住がある。

★

朝がアルミニウムの飛行艇で來る。

★

島の眞中に木が一本ある。外になにもない。

★

集團指揮者の銃殺の音。まだらな雪の中の白樺の皮膚。憲兵は地圖を持つて來るだらう。幾度

も私の窓の下を往き來してゐるクララ。彼女の縞のスカアト。私は灌木の蔭へ日記を埋めた。

★

林の入口に白い札が立つてゐる。

——靴をぬぎたまへ。

★

叔父は弗を買ひ續けてゐる。祖母は妹の結核菌を培養してゐる。救世軍本部の塔から、輕氣球が出發する。私はもう長いこと、フロイド博士の門に出入してゐる。博士の庭園には循環する眞蒼な小路の外になにもない。ドビュッシイから金を借りたことのある庭番が居る。終日蜂の巣で蜂が唸つてゐる。十時になるときつと共產黨員の黑い帽子が垣根のそとをとほる。

★

新しい靴の屆けられるまで、彼女のしてゐるマニキュア。窓の眞黑い猫の退屈。高架電車が正午の橋の上で停車すると、安南、スマトラ、サモアの土人等が續々と下車する。法學通論の教授は髭と鞄とを持つてシネマ館へ駈け込む。海港のヒンタアラントの森林とシヤトオとライ麥を賣つて、私はホッテントット人に放蕩を敎へなければならぬ。砲兵隊列が地平線にうち上げる層雲。そのための高氣壓。

★

綠色に塗つたロマンティスムの巡洋艦が遊弋する。リナリアの咲きみだれた斜面を行けば、君は棉花貿易會社の廢墟に到着する外はあるまい。

目錄

イカルス失墜　五
假面　一九
睡り羊　四七
綠の循還路　五五

昭和八年貳月拾貳日印刷　昭和八年貳月拾七日發行

著　者　伊藤　整

刊行者　百田宗治

印刷者　苅谷源次郎

發行所　椎の木社　東京市中野區川添町四拾六番地

限定刊行貳百八拾部　價七拾錢

1933.2.28
シイノキ社